

農村におけるイノベーターのライフヒストリー研究 -芸西村を事例として-

1130457 谷 直彦

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

地域活性化に置いて農村内の農家1戸ずつが事業家としてきちんと収益をなることが重要である。高知県安芸郡芸西村は、農業が活発で1戸当たりの収入が県内トップであり、多くの農家が目指すモデルとなりえる地域である。その背景のひとつとして一部の先駆的な農家（イノベーター）の存在を挙げることができる。そこで本研究はどのような要因からイノベーターになって地域を引っ張っていくのかを明らかにすることとする。

研究方法としてはライフヒストリーの手法を採用し、村内の2人の農家に対して合計7回のインタビュー調査を行った。その結果をふまえて、農家が新しい技術、品目の導入し成功体験をし、その成功体験から自信や金銭的余裕を持ち、それが再び新たな技術の導入につながっていくという持続的プロセスをモデル化した。これにより、2人がイノベーターとなった要因の中で何が共通し、何が異なっているのかが明らかになった。また、農村イノベーターや、起業家の特徴に関する先行研究の知見との比較を行なった。

2. 背景

地域活性化に置いて農村内の農家1戸ずつが事業家としてきちんと収益を挙げられるようになることが重要である。高知県安芸郡芸西村は、農業が活発で1戸当たりの収入が県内トップであり、多くの農家が目指すモデルとなりえる地域である。

3. 目的

芸西村は、農業が活発で1戸当たりの収入が県内トップである背景の1つに一部の先駆的な農家（イノベーター）の存在を挙げることができる。そこで本研究はどのような要因からイノベーターになって地域を引っ張っていくのかを明らかにすることとする。

4. 研究方法

事前調査として実際に下の図にある芸西村の農家の方や、安芸の農業振興センター、芸西営農センターを訪問し、これまで導入した技術革新、村内での情報共有の場、これまで農業をされてきた試行錯誤、集荷上の部会の現状や、行政組織の現状、他地域との比較、現在の芸西村の農業の現状や、先進的農家との関わり、昔から芸西村の農業を引っ張ってきたイノベーターの方などを教えていただいた。

研究方法としてはライフヒストリーの手法を採用し、村内の2人の農家に対して合計7回のインタビュー調査を行った。その結果をふまえて、農家が新しい技術、品目の導入し成功体験をし、その成功体験から自信や金銭的余裕を持ち、それが再び新たな技術の導入につながっていくという持続的プロセスをモデル化した。これにより、2人がイノベーターとなった要因の中で何が共通し、何が異なっているのかが明らかになった。また、農村イノベーターや、起業家の特徴に関する先行研究の知見との比較を行なった。

5. 結果

5.1 A氏結果

A氏に対してライフヒストリーの手法を用いて5回のインタビュー調査を行なった。

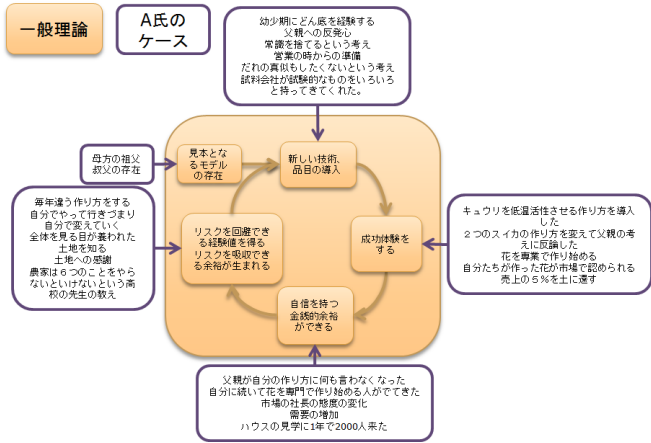
5.1.1 プロセスモデル

A氏のインタビュー結果をもとにA氏の新しい技術、品目の導入し成功体験をし、その成功体験から自信や金銭的余裕を持ち、それが再び新たな技術の導入につながっていくという持続的プロセスをモデル化した。

以下がそのプロセスモデルである。

年度	市町村	野菜								合計	
		ナス		ピーマン		トルコキキョウ		ブルースター		台数	面積
		台数	面積	台数	面積	台数	面積	台数	面積		
H21	安芸市										
	芸西村	8	38					2	11	8	38
	小計	8	38	0	0	0	0	2	11	10	49
	累計	8	38	0	0	0	0	2	11	10	49
H22	芸西村	8	38							8	38
	小計	8	38	31	107					31	107
	累計	11	58	31	107	0	0	10	35	52	200
	累計	11	58	31	107	0	0	12	48	55	183
H23	芸西村			10	39					10	39
	小計	0	0	30	112	4	34	9	35	43	181
	累計	0	0	63	292	4	34	9	35	86	361
	累計	11	58	114	399	4	34	21	81	150	572

年度	市町村	野菜								合計	
		ナス		ピーマン		トルコキキョウ		ブルースター		台数	面積
		台数	面積	台数	面積	台数	面積	台数	面積		
H20	芸西村	1	18	5	88	1	18			7	124
H21	芸西村	6	123	15	284	3	43			24	435
H22	芸西村	7	132	2	35					9	167
	小計	6	125	4	57	6	123	2	30	18	335
H23	芸西市	13	297	6	92	6	123	2	30	27	502
	小計	3	45	1	10					4	55
累計	23	448	27	452	10	185	2	30	62	1116	



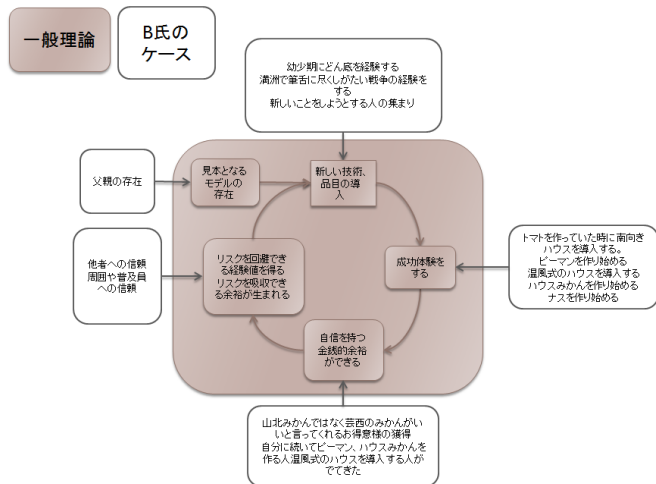
5.2 B氏結果

B氏に対してライフストーリーの手法を用いて5回のインタビュー調査を行なった。

5.2.1 B氏プロセスモデル

B氏のインタビュー結果をもとにA氏の新しい技術、品目の導入し成功体験をし、その成功体験から自信や金銭的余裕を持ち、それが再び新たな技術の導入につながっていくという持続的プロセスをモデル化した。

以下がそのプロセスモデルである。



6 既存研究との比較

2人のライフストーリー研究をもとに既存研究との比較を行なった。

6.1 土地の大きさ

- 既存研究では、土地が大きい方が失敗した時の損失を吸収できるので農業イノベーションを導入しやすいといわれている。高知県内の農家の平均耕地面積は 88.8a であり芸西村の施設園芸農家の平均耕地面積は 35a ほどである。そのため芸西村は他の地域の農家と比べて経営規模が小さいと言えるが、革新的な農家が多い。そのため小さな土地でも

イノベーターとしてやっているという1例であるといえる。

6.2 教育年数の長さ

既存研究では、学校教育の年数が高いほど、蓄積された知識が多いため、物事を経済的・合理的に考えられ、新しく良い技術を導入しやすいといわれている。

しかし、教育年数が高いこと自体ではなく常に向上心、現状に満足せずに遭遇するあらゆる状況を改善しようとする、もしくは、他の組織から情報を得られるつてがあることがより根本的な条件であることが示唆された。

実際、A氏は、戦後、間もないころに進学に反対だった父に土下座してまで頼み込んで高校に進学した。だが、A氏をイノベーターとして突き動かしたのは、父親への反発心や、母方の叔父の影響と、自分で道を切り開きたいという思いであった。

B氏は14歳の時に義勇隊として中国に開拓団として渡ったため、学校教育の年数は長くはない。それでも向上心や、イノベーターとしてありたいとする執念、他の組織から情報を得られるつてを使い、イノベーターとして長年に渡り芸西村の農業を引っ張ってきた。

6.3 土地から動けないことがイノベーターに与える影響

既存研究では言われていないが、農村は閉鎖的な空間であり、農業の特性上土地を簡単に変えることはできない。そのため変わり者どうしが集まり、精神的なつながりをつくり、このつながりを変わり者同士土地からは逃げられないので強くなる。この変わり者の集まりが先頭集団となり地域のイノベーションの導入を引っ張っていくという芸西村のイノベーション導入のプロセスを発見した。

7 今後の課題

本研究は2名のライフストーリーインタビューに基づいて農家がイノベーターになるプロセスを一般化した。今後はこの件数をさらに増加させ、妥当性を検証していくことが求められる。

引用文献

- [1] 「ベンチャー想像の理論と戦略 起業機会探索から資金調達実践までの方法論」 ジェフリー・A・ティモンズ著 千本倅生・金井信次訳
- [2] 「高知県の園芸」 発行者 高知県農業振興部産地・流通支援課
- [3] 「イノベーションの普及」 エベレット・ロジャース著 三藤利雄訳
- [4] 「キャズム」 ジェフリー・ムーア著 川又政治訳